

# 自然の中で 野外教育情報

2015 | 第 2 号 | ◆今号の特集◆  
「私の好きなフィールド」

平成27年7月20日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

## アイオレ(IORE)講習会のこだわり

土井 浩信

(日本教育科学研究所自然体験活動推進委員・淑徳大学教授)

20数年前のことでした。日本教育科学研究所からIORE普及促進のための講習会開催が提案され、私はこの講習会を始めるにあたって、大変我が儘な注文を出しました。

- ☆ 野外ゲーム指導法だけに特化した日本で最も贅沢な講習会にすること。
- ☆ 講習参加費を出来るだけ安価にして参加しやすくすること。
- ☆ IOREシートに対してオリジナリティーを主張しないで自由に使うこと。
- ☆ 野外ゲームの学習会だけではなく、ゲームの創り手を増やすこと。
- ☆ 講習会参加者の人的交流を深めること。

以上を実現させるためのキーポイントが、

<3日間の講習会の全日程に張り付く6名の講師をつけること>でした。

パッケージドプログラムでは、シートに示された手順で行えば一定の効果があるとはいうものの、自然体験教育活動には法則化されたものは無く、必ず<人を介して>伝えられていきます。同じプログラムでも人が変われば伝わることも変わります。「面受教育の妙」がそこには存在します。メイン講師一人だけでは一人だけの伝わり方しかしないけれど、多くの講師が集まってチームを組めば、相乗効果もあって色々な伝わり方が生まれてきます。ここは絶対に外せないとお願いをしました。良き講師陣に恵まれたことが最も大きな要因ですが、講習会の手応えは充分で、IOREのうねりが起こったのです。

数年後、IOREが徐々に野外教育の世界で知られるようになった頃、研究所の機関誌の1つとして野外教育情報第1号が発刊されました。今は絶版の「自然体験活動の方法」が出版されたのも同時期でした。これらの情報誌も今は一新し、学習効果の高い野外ゲームの創り手も増え、IOREシートは我が国のパッケージドプログラムとして定着しました。

そして今また、次々と新たな<人を介して>更なる普及に向けて動いています。

# 湯の丸高原



井上 忠夫

長野県にある湯の丸高原は日本のほぼ中央にあり、2000m前後の山に囲まれています。この高原のある峠は、長野県と群馬県の県境にあり、1734mほどですが、群馬県側にも見る場所があります。

高原にはキャンプ場があり、テントを張る場所は1750mほどあります。私は9月の終わりによく行っていましたが、この時期は霜が降り、氷が張るなど最低気温は-2℃を経験しています。

この高原に行く途中、道路の左右に石地藏が立っていて、その昔、群馬県側の旧鹿沢温泉に行く安全祈願のために設置されたようです。中でも、一番観音、五十番観音、八十番観音（湯の丸高原）、九十番観音、百番観音がとても大きく見ごたえがあります。この百番観音の先に「玉だれの滝」があり、それほど大きくはないのですが、とても雰囲気のいい場所でぜひ見ていただきたい滝です。

湯の丸高原の周りの山は、それぞれが登山できる山です。一番近い山は湯の丸山（2101m）で、その奥に烏帽子岳（2066m）があります。

また、浅間山の方に向かい、高峰高原があり、南側に高峰山（2106m）、東側に黒斑山（2404m）があります。黒斑山から見た浅間山は、そのすそ野が黒斑山まで繋がり、とてもダイナミックな景色です。西側には三方ヶ峰（2040m:コマクサの群生地）その北側には、籠ノ登山（2227m）があり、山頂は360°の展望がきく素晴らしい場所です。

この湯の丸高原の一带は、日本海側の北アルプスの冷たい気候と太平洋側の暖かい気候が交差する場所で、高山植物や低山帯植物が混生する大変珍しい場所です。

4月の終わりごろからフクジュソウ、ザゼンソウに始まり、約600種を超える花々が見られるようになります。6月中旬を過ぎると湯の丸山の中腹をレンゲツツジが咲き誇り、約30万株が山一面をオレンジ色に染めてくれます。この景色は本当に素晴らしくいつまでも心に残る景色だと思います。

キャンプ場の奥には湿原があり、7月ごろにはヒオウギアヤメが一面に咲きだします。

私はこの湯の丸高原には、昭和43年から行っていますが、地元の人との関わりも大切にしてきました。湯の丸高原ロッジからホテルへ移行した時の、先代の社長や現社長、支配人等々従業員の方々にもよくしていただいて感謝をしております。

自然保護指導員の柳沢家門さんには本当にお世話になりました。すでに亡くなっていますが、学生の前で実に多くのお話をさせていただき、感謝の念で一杯です。今でもご子息の柳沢孝さんのお世話になり、とてもよくしていただいています。

私は43年間大学で野外教育を担当してきました。湯の丸高原は私の先生です。今でも行きたい場所は湯の丸高原です。

湯の丸高原、ありがとう。



大学の学生たちと

## ● 井上 忠夫 【いのうえ ただお】

順天堂大学前教官

1944年生まれ。岐阜県出身、印西市在住。43年間、順天堂大学に勤め、野外教育研究室にて多くの学生を指導する。現在は千葉市青葉看護学校の非常勤講師の傍ら、リバーカヤック、自転車、スキー、キャンプ等の活動をしている。

# 山と海とに暮らして



戸高 優美

長女が生まれてから幼少期まで、自然豊かな山中湖で暮らしてきました。

そこでは、子どもたちは森を駆けめぐり、地面を掘って泥遊び。母たちは焚き火を囲んで煮炊きをしなが、なんでも話し合う、仲間たちとの分かち合いの場となる自主保育を行っていました。

娘が小2の時、学校に馴染めず、海の空気に触れて気持ちや生活を整えようと、妹宅のある葉山に通い始めました。

通ううちに自然と近所の子どもたちと放課後の空地で遊ぶようになりました。

ある日ひとりのガキ大将が「なんで平日なのに遊びに来ているの？」と娘に問いました。

娘が「学校が怖くて行けなくなっちゃったの」と事情を話すと、「俺らの学校はスゲーいいぞ！俺が先生に話してやるから、俺らの学校に転校しちゃえ！」と頼もしい言葉をかけてくれました。その言葉で娘は「葉山の学校に行きたい」と言い出したのです。

親子会議の結果、長らく暮らした山中湖を離れ、母子で葉山に移住することになりました。

こうして平日は葉山で学校生活と海遊び、週末は山中湖で山遊びという生活がスタートしたのです。

6月、下校するやいなや、すぐに水着に着替え海に集合！子どもたちが集まり、浜サッカー、ビーチドッチ、ボディサーフィン…と、海の状況とみんなの気分で、遊びは次々に生まれていきます。

そこには、習い事の時間に戻らない子どもを探しにやってくる母親や、海を眺めに立ち寄る母たちもきます。「まったく遊んでばかりで困っちゃう！」と言いながらも、子ども期のかけがえのない時間を尊重する親たちの笑顔とつながりが生まれます。

7月、夏の太陽が輝きだすと、子どもたちの遊びは、素潜りや飛び込みへとステップアップしていきます。海で遊ぶときには安全を見守るために必ずついていきました。

私だけでなく、同じ思いの保護者はいて、日傘をさしたお母さんがマイチェアに座り、子どもをやさしいまなざしで見守り、時にはお父さんが子どもたちと飛び込みをしています。そんな時は自然と挨拶をしてうちとけていきました。大人も子どもも海のある暮らしを楽しんでいる豊かさが感じられます。

私は子どもが海に遊び躍動している姿や、波と戯れ調和している光景に、子ども自身の確かな存在を感じています。自然があり、あるがままに子どもがいれば、自ずと豊かな時間は開かれていきます。

海と山、私にはどちらも大好きな場所です。

## ● 戸高 優美 【とだか ゆうみ】

野外学校FOS事務局

淑徳大学野外研究室卒業後、東京学芸大学野外研究室研究生、OBS非常勤スタッフを経て、フリーランスの野外指導者となる。

1995年登山家戸高雅史と結婚し、パキスタン・ネパール・チベットのヒマラヤ登山のベースキャンプマネージャーを務める。子どもが生まれてからは出会う母たちと、自然を舞台に、共に育ちあう場を創り続けている。



葉山の海で躍動する子どもたち

# 米国アラスカ州ルース氷河

私の好きなフィールド



## 渡辺 直史

圧倒的な空間の広がりマイナス30℃の寒さ、そして至る所に口を開けている氷の裂け目クレバス——雪と岩と氷だけのこの世界で唯一安全な場所と言え、広さ4畳半ほどの山小屋が立つ小高い丘の上だけです。しかし何日かここで過ごしていると、そんなことも次第に気にならなくなってくるから不思議です。

氷河でのキャンプ中、私たちが静かに見下ろす北米最高峰のマッキンリー山は、太陽の傾きによって千変万化し、一日中眺めていても飽きることがありません。丘を下る広い斜面はそのままソリやスキー遊びのフィールドになります。

見渡す限り誰もいないこの場所で心ゆくまで遊んでいると、全ての自然が自分に属しているような……あるいは自分がこの大自然の一部になったような感覚になることがあります。氷河に潜む危険も受け入れた上で、そこにある美しいものや感動的なもの、一つひとつに感覚が開かれていくと、やがて心の底から解放され、叫び出したくなるような自由な気持ちで満たされます。

そして今思えば、こうした究極の自由が最終的にもたらすものは「自分自身との深いつながり」のような気がします。例えばそれは、心臓の鼓動が聞こえるほどの静けさの中でオーロラを見上げながら感動に震える時、「ああ、まぎれもなく今自分は生きている！」と実感することだったり、また、周囲の谷で突然起こる雪崩を目の当たりにして、自分はただ「生かされているにすぎないのだ」と気づいたり、あるいは日本での日常で知らぬ間に縛られていた様々なものを超えて、この先自分が「本当に大切にしたいもの」を見極める視点が芽生えてきたり…。

アラスカに暮らす人たちでさえ滅多に立ち入ることのないこのフィールドを私たち日本人に紹介してくれたのは、写真家の星野道夫さんです。

星野さんは約1か月もの間、この場所でたった

一人でキャンプしていた時に、その体験を日本の子どもたちと共有しようと思いつき、大学時代の仲間とともに「子どもたちのアラスカキャンプ」をスタートさせました。

このキャンプは、1996年に星野さんが亡くなった後も有志によって受け継がれ、今も毎年春休みに実施されています。

「人生で様々な岐路に立ったとき、人の言葉ではなく、いつか見た風景に励まされたり、勇気を与えられたりすることがきっとある…」星野さんのエッセイ集『旅をする木』に綴られているこの言葉に導かれるように、私も2001年以降、このキャンプのお手伝いをさせていただいています。

どこまでも澄んだ冷たい風、マッキンリーの優しい山容、遠くに響く雪崩の音、降るような星空とオーロラのゆらめき——目を閉じれば、いつでもあの風景と共に、自分自身との深いつながりも思い出すことができる——それが、私の好きなフィールド 米国アラスカ州 ルース氷河です。



ヘトヘトになるまでソリ遊び

### ● 渡辺 直史 【わたなべ なおふみ】

ブルネット(株) アウトドア共育事業部 統括リーダー

新潟県出身。山岳写真家助手、児童養護施設職員等を経て現職。WEBサイト [www.fieday.net](http://www.fieday.net) を中心に、自然ガイドや指導者のための事業を展開中。(公財)日本アウトワード・バウンド協会 安全委員。

オーロラクラブ「子どもたちのアラスカキャンプ」運営スタッフ。

# 野尻キャンプと私



田中 祥子

私は東京YWCAのキャンプに大学生の頃から60年近く関わっている。キャンプは愛を経験できる最高の場である。人間だけでなく虫も鳥も、草も花も木も、地球上に生きるものすべてに対する愛を感じるのは、私だけではなからう。そこでは自分が素朴になり、好きな自分になれる。大自然の懐にいたることが人間を素直にする。私にとって地球上で天国に最も近いのは、野尻キャンプである。共に生きる姿勢を知らず知らずのうちに身につけられるのが、オーガナイズド・キャンプである。

野尻キャンプ場は1932年、カナダから来たエマ・カフマン女史らによって開かれた。彼女は、当時の日本社会において女性が自主自律を身につけるには女子だけの集団生活の体験がよいと考え、自身がカナダで経験したYWCAのキャンプを思い出し、それを全人教育の近道と考えた。そして、黒姫山にも近い野尻湖の畔(ほとり)、その静かな自然環境に魅せられ、琵琶ヶ崎と周辺の4万5千坪を購入した。

それが野尻キャンプの始まりである。

公道から林の中を10分ほど入ったところから、キャンプの建物は始まる。まず車いす対応のゆかりハウス。続いてリーダー達のための建物が林の中に点在する。そして、メイン・ホール。かの有名なヴォーリズ氏の息がかかっているかもしれないと言われている。その先に8つのキャンピングが点在している。そこでは今でもランプの生活である。



野尻湖でのボート遊び

キャンプの一日は朝の礼拝、旗揚げ、外での集いから始まる。メイン・

ホールでの食事は円卓を10名ほどで

囲み、半数が食べ終わると歌、歌。歌はキャンプのバックボーンではなからうか。掃除と皿洗いを終えると、いつもアッセンブリー（話し合い）をしてキャンパーとリーダーの意見で最終的プログラムが出来上がる。キャンピング単位の小グループを大切にしているのだ。

早朝探鳥ハイク、飯盒炊飯、キャンプ・ファイアー、追跡ハイク、水上オリンピック、スタンツ・トリップ（キャンプサイトの数か所での寸劇）、湖上礼拝、星座と神話の会などの活動があり、その中でさまざまな小グループを作り、互いに触れ合う。種目別の時間には、アーチェリー、カヌー、水泳、ボート、アートとクラフト、音楽、自然観察、ロープ・ワークなどから、キャンパーは好みの種目に参加する。

午後の1時間は、私が「さやさやタイム」と呼ぶ、一人で静かに何をしてもよい時間とする。眠るもよし、水辺で鳥の鳴き声や風のさやさきを楽しむのもよし。キャンプというグループでの「動」の時間が中心になるが、この一人の「静」の時間に新しい自分の発見がよくある。

キャンプでは楽しい中で多くを学び、感性を磨く。先生でもない親でもない、若い先輩であるリーダーの後ろ姿から学ぶことが多い。すべてのリーダーが愛を持って「共に生きる」姿勢をキャンパーに知ってもらう。それは世界平和に繋がる。

私は野尻キャンプが、今でも私を育ててくれていると信じて疑わない。

## ● 田中 祥子 [たなか さちこ]

野尻キャンプ・リーダー、国際キャンプ連盟顧問、アジア・オセアニア・キャンプ連盟顧問。

東京YWCA学院福祉科元講師、津田塾大学元教授

# 自然との共成の場「くじゅう」



## 築山 泰典

福岡大学スポーツ科学部では、正課授業としてキャンプ実習を実施しています。阿蘇くじゅう国立公園内にある「福岡大学くじゅうの杜キャンパスやまなみ荘キャンプ場」を拠点とし、8月中旬と9月上旬に4泊5日の日程で100名×2回の実習を実施しています。



ほどは、法華院から近い「立中山(たっちゅうさん)」での活動が中心であり、近年そこはミヤマキリシマ開花ピークの時期には「登りやすくミヤマキリシマも多く美しい場所」と登山者からも好評を得る場所へと変化しています。

多くの学生は卒業後、中学校や高等学校の保健体育の教員となりますが、教員となって、生徒たちと野外教育として九重の山々を訪れることを願っています。その時、歩きやすい登山道や山いっばいに広がるミヤマキリシマを指差しながら、このワークのことを自慢してほしいと願っています。

九重連山は、九州で最も人気の登山地であり、年間20万人が訪れるとされ、特に5月下旬から6月中旬にかけては、天然記念物でもある「ミヤマキリシマ」が周囲の山々をピンク色で覆い、多くの登山者が訪れます。そのため、登山道への影響も強く、初めて私がこのくじゅう連山を登った時、ハードルようになった「階段の名残」に驚かされました。本学のキャンプ実習でも登山をプログラムとして取り入れたかったものの、人が自然へ与える影響の大きさ“100人×2回の環境への影響”を考えると、躊躇せざるを得ない状況でした。

しかし、その後、九重連山の中心にある「坊がツル」に位置する法華院温泉山荘の弘蔵岳久氏と出会い関わる中で、「くじゅうの自然を守る会」の方々が中心となり登山道の補修活動などをされている状況を知り、平成21年よりキャンプ実習の一つのプログラムとして“環境保全ワーク”を展開することとなりました。

具体的な環境保全ワークの内容は、土嚢袋に石を10kg強入れての運搬や、杭や板を用いての補修活動(写真)などの「登山道の整備活動」や、ミヤマキリシマの生育のために周囲の木々を伐採する「ミヤマキリシマ保全活動」が中心となります。どの活動も法華院温泉山荘までの3時間程度の遠征の後の活動となるため、身体的にも過酷な作業となりますが、さすがはスポーツ科学部の学生、積極的に取り組んでくれています。ワーク開始3年

当然、自然環境と人間との関わりを論じる際、如何に環境への影響を最小限に留めるかとの「ミニマムインパクト」の発想は大切です。しかし、自然環境のために敢えて人が手を加え自然にとって良い状況へ導く作業や、その経験から人も自然より学ぶことにつながる、このような環境保全ワークも必要ではないかと考えます。

私は、キャンプ等の野外教育の場を、そこに関わる人や自然から「自ら学ぶ成長の場」と捉えています。自然もより良く成長するよう「人と自然の共成の場」として、今後も九重での環境保全ワークを続け、九重と言うフィールドと共に学生と私も成長していきたいと考えています。

### ● 築山 泰典 (つきやま やすのり)

福岡大学スポーツ科学部准教授

京都府出身、京都教育大学大学院修了後、民間企業での営業職を経て、京都YMCA国際福祉専門学校で教員としてスタートする。2006年より福岡大学にて野外教育・レクリエーションを担当する。学生共に、本務校の実習以外に、不登校生徒のキャンプやJリーグのチームビルディングキャンプ等多様なキャンプの企画運営に関わる。キャンプにおける、指導者と参加者、そして自然との関わりにおける成長の在り方を追求している。

# 大切な場所は原点回帰の場所

## 北原 澄高

この原稿の依頼を受けた時に、すぐに頭に浮かんだキャンプ場が二つあります。どちらかに絞ることができなかつたので、二つのキャンプ場について紹介させていただきます。

はじめに紹介するのは群馬県嬭恋村のバラギ湖畔にあるキャンプ場です。ここは私が初めてキャンプを体験した場所であり、その後、指導者としての知識や技術を学んだスタートの場所でもあります。現在は当時の面影を残しつつオートキャンプ場として多くの方に利用されているようですが、当時はびっくりするくらい何もないキャンプ場でした。蛇口が6個程付いたシンクと仮説トイレだけで、ここで生活が成り立つのか不安になったことを覚えています。

しかしながら、四阿山(2354m)への登山、的岩でのロッククライミング、宇田沢での沢登り等、大自然の中での様々な活動の魅力に取りつかれてしまい、未だにキャンプを続けている次第です。恩師やたくさんの先輩・後輩との団欒も鮮明に覚えています。この仕事をしている限り、忘れられない私の原点となるキャンプ場です。

二つ目のキャンプ場は、静岡県立朝霧野外活動センターです。富士山の西麓の朝霧高原にあり、かれこれ20年近く利用しています。富士山は言うまでもありませんが、毛無山(1964m)、雨ヶ岳(1772m)などの山々に囲まれた高原には牧草が広がり、自然の雄大さを感じさせてくれます。少し足を延ばせば水辺活動ができる川や湖もあり、ハイキングやMTBなどの活動もできます。幼児から大人まで飽きを感じずに過ごせるキャンプ場です。現在、私自身が担当しているキャンプを含め、毎年一か月ほど通い詰めています。

私がこのキャンプ場に思い入れがあるのはキャンプ場自体の魅力だけではありません。それは「人とのつながり」を大いに築けた場所だったからで、初めてここを訪れた時に行われていたキャン

プの若いスタッフに刺激を受けたことが始まりです。

そのキャンプとは、小中学生を対象にした長期キャンプでした。同年代の若者がカウンセラーとして生き生きと活躍している姿を目の当たりにし、自分の未熟さを痛感したことを記憶しています。

その後、そのスタッフたちとの交流が徐々に増え、切磋琢磨してきたことで今日の自分があると思っています。現在の朝霧野外活動センターの職員はその当時から付き合いのある仲間であり、いつでも温かく迎えてくれるということが、このキャンプ場に通い詰める最大の要因になっています。



MTBの目的地、陣馬の滝にての一コマ

この原稿を書きながら考えたことは「大切な場所＝人とのつながり」を私は大切にしてくられたということです。キャンプ場の魅力はそこにある自然やそこで展開される様々な活動だけではなく、そこに集う人々の関わりが大きいのだと改めて気付きました。これからも大切な場所を増やせていけるように、そして大切な仲間を増やせるようなキャンプを展開していけたらと思います。

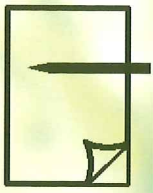
### ● 北原 澄高 (きたはら すみたか)

中央大学・東京成徳大学等で非常勤講師

1969年生まれ。神奈川県出身。

東京学芸大学大学院修了。教育学修士。

主に野外教育を研究。夏季及び冬季には、大学等のキャンプ実習を指導。



# 体験、学習から 指導者へ

櫛島 隼人

## 講習会への参加

平成24年10月、群馬県にある「国立赤城青少年交流の家」にて開催されたアウトドアゲーム指導法講習会に参加しました。この講習会では、実際に「IOREシート」を使って参加体験・指導体験を行います。両方の体験を行えることに、この講習会の良さがあると感じています。

しかし、「体験する」だけでは、講師の人の凄さが際立ち、自分にはできないのでは？と不安になることがあります。ただ「中身」を学ぶだけでは、実際の現場のイメージが持ちにくいのです。「体験し、中身を知る」ことが同時にできるこの講習会は、現場で実践するために必要な要素をたくさん含んでいます。

参加者同士で「楽しさ」を共有できることも充実した学びの大きな要素です。「自然」「環境」「体験」など、共通のキーワードの元に集まる全国の仲間との出会いは、自分の可能性を大きく広げてくれました。講習会ではチームに分かれてゲームを企画する時間が設けられます。その過程で多くの体験談と価値観を共有でき、参加者全員が互いの「講師」となり得るのです！こんなに多くの「学ぶ要素」がある講習会に出会えて良かったと感動したことを今でも覚えています。

そして何より、それぞれのゲームを「何のために」行うのかをしっかりと学べたことに感謝しています。ゲームをた

くさん知っている、ゲーム自体を体験することが目的になってしまうことがあります。しかしこの講習会では「なぜそのゲームを選ぶのか」ということをしっかり学習できました。各ゲームが大きく分けて4つに分類されているため、参加者側も情報を整理しながら受講できるのです。

## 実際の使用

ある、知的障害を持った子どもたちの団体へプログラム提供を依頼されたときにIOREシートを活用しました。各シートにはゲームの目的や進行方法が書いてあり、対象者をしっかり把握できれば、指導の現場でも不安が激減されます。僕も実際にシートを手に持ち、会場へと向かいました。

シートの解説と自分なりのメモを読むだけで、ゲームの進行ができました。団体の補助の方にもシートを見ていただくことで、イメージを共有して指導に当たれます。

講習会で6人の講師の、それぞれの指導法や指導スタイル、キャラクターを生かした雰囲気作りを体験していたため「自分だったらどう指導しようか」を考え、当日を迎えられたのも大きいです。

現在は幼児向けのプログラムを提供することが多いのですが、ここでもIOREシートは活躍しています。せっかくいただいた「知識」と「経験」、上手に使って、自然の中で遊ぶことの楽しさをさらに広げる一翼を担いたいと思います。

### ● 櫛島 隼人 (めでじま はやと)

NPO法人あかぎの森のようちえん理事長

昭和57年生、群馬県多野郡吉井町出身。幼少期より地域の子ども会活動に参加し、その縁で、高校時代よりボランティア活動に熱中する。子どもと関わることが楽しくなり、保育士資格・幼稚園免許2種を取得。障害者福祉の仕事9年続けるも、東日本大震災と祖父母の介護をきっかけに退職。

今までボランティアで関わってきた「自然体験」の経験を生かし「あかぎの森のようちえん」を設立し、主に幼児への自然体験活動プログラムを提供している。



大地のキャンパス(幼稚園児たちと雨上がりに)



# アウトドアゲーム指導法 講習会のすすめ

矢島 みゆき

2014年10月、8年越しの念願が叶って「アウトドアゲーム指導法講習会」(以下アイオレ講習会)に参加をしました。初めて参加した私が講習会で特におすすめしたいポイントをご紹介します。

## 1. 豪華な講師陣によるアクティビティの提供

アイオレ講習会の大きな魅力の1つは、なんと言っても講師陣が豪華なことです。野外教育・自然体験活動の分野で全国的に活躍されている方々が、期間中は大変身近な存在に感じられます。

講習会の初日には、体験を兼ねて受講者同士のアイスブレイクゲームがあります。始まって早々のため緊張した様子の受講者もいましたが、講師陣の巧みな話術と自然の中で体を動かす気持ち良さで、あっという間にみんないい笑顔になりました。

今まで何度も体験していて子どもたちに提供しているゲームでも、人や場所、対象が違うと、また違う楽しみがあると再認識しました。学生や社会人といった受講者間の立場の違いも、ここで一気に取り払われた気がしました。

## 2. ワークショップ型の数多き実習

アイオレ講習会は2泊3日「自分が体験してみる→自分たちで作ってみる」という流れで組まれています。日常的に自然体験活動をしている人もそうでない人も、同じようにまずは4つの型のゲームをグループごとに体験します。

体験したゲームの中で、特に印象に残っているのはナイトゲームです。キャンプファイヤーや星空観察の講習会はよく聞きますが、ナイトゲームの講習会はあまり聞いたことがありません。今回は「見れば見るほど、な～るほど!」のナイトバージョンを体験したのですが、昼とは全く違う森の様子がとても面白く、自分では思いつかない想像力豊かな答えに「なるほど!」と思えたのは、色々なグループがそれぞれの感性を持ち寄ったか

らこそだと感じました。

## 3. ゲーム創作時の活発なコミュニケーション

「自分たちで作ってみる」の時間は非常に短く、2日目の夕方から夜にかけての数時間しかありません。限られた時間で仕上げるのは大変ですが、仲間と力を合わせて意見をぶつけ合いながらの作業は非常に心地よいものでした。既にシートになっているものはダメ、ありきたりじゃダメ、でも広く活動してもらえる内容が良い…と、試行錯誤で形になって企画書を提出できたのは、確か締切4分前のこと。翌日は発表と講師による講評がありましたが、どのグループも自分たちの案が一番魅力的であると信じて、堂々と発表していました。



個性のぶつかり合いでようやく形になった瞬間

完成度の高いものはアイオレシートになり、翌年以降も活用されていくとのこと。2泊3日間を通して、アイオレ講習会の魅力にはまり何度も参加している受講生の気持ちがよく理解できたのは、言うまでもありません。

### ● 矢島 みゆき (やじま みゆき)

千葉県君津亀山少年自然の家指導室長

旧姓斎藤。1985年生まれ。北海道生まれの千葉育ち。淑徳大学社会学部社会福祉学科卒業。在学中は野外教育学研究室に所属。卒業後は千葉自然学校の研修生を経て職員になる。現在は指導室長として、0歳からシニアまで、対象を幅広く活動中。



# 大切にしている 2つのこと

野口 和行

おかげさまで、さまざまな団体や施設から自然体験活動の指導者を対象とした講習会の講師として呼んで頂くことがあります。「指導者を目指す人たちに半日程度の自然体験活動のプログラムを指導して下さい」というリクエストを受けたら、アイオレシートの出番です。

アイスブレイクとして「ジャンケンでアイスブレイク」や「私は誰でしょう」、自然体験の導入としてフィールドを駆け回る「林間立木取り」や「ハンティングゲーム」、フィールドに目を向けるきっかけとして「森のビンゴ」、「森のつながり探し」、「カメレオンゲーム」、「『ちょっとだけ』よ」、自然の素材を使用した作品作りの「モンタージュ」、「森のレストラン」、「スカイライト・ギャラリー」などが私のお気に入りのゲームです。

指導者を対象とした自然体験活動としてアイオレシートを活用するときに、私が大切にしていることが2つあります。

1つめは、「問題づくりからゲームにする」ことです。

例えば、「森のビンゴ」というゲームは、フィールドにある自然物をビンゴ形式のマス目に記入し、それを探してくる活動です。参加者全体をいくつかのグループに分け、ビンゴシートをグループで作成し、他のグループに出題するとしたら、どのようなビンゴシートを作るでしょうか？

ある人は、自然の中の色にこだわるかもしれません。ある人はこのフィールドで見つけてもらいたい物を選ぶかもしれません。ある人は、よく探さないと見つからない物を選ぶかもしれません。ビンゴシートのマス目に何を埋めるかは、その人がフィールドをどのように見ているかを表しているともいえます。

また、「良い問題」は、簡単に解けてしまうものや、2つ3つしか見つからないものではありません。

～私のアイオレシート活用法～

参加者の特性に応じた適切な問題を作成することも重要な点です。

つまり、問題づくりを通して、グループメンバーのフィールドの見方を共有するとともに、参加者の特性に応じたアクティビティづくりという学びの機会とすることができます。

2つめは、「作品をつくる」ことです。

「もの作り」は夢中になって取り組むことのできる活動です。そして、成果が形となって残ります。例えば、「森のレストラン」は、自然の中にある葉っぱ等の自然物を使用して「幕の内弁当」や「お子様ランチ」といったメニューを皿や器の上に盛りつけます。子どもの頃に楽しんだ「おまご」とのような活動が作品として残り、同じテーマでもグループの個性によってさまざまな「お子様ランチ」が出来上がります。

作品を作り上げる達成感と、お互いの作品を鑑賞する楽しさ、その両方を味わうことができるのが「作品をつくる」ゲームです。

もちろんこの2点は、子どもたちを対象とした活動でも大切なことです。ただ、「問題づくりからゲームにする」ときは、どんな問題が良い問題なのかを指導者がわかりやすく説明するとさらによいでしょう。

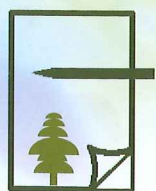
自然の中で活動する楽しさを伝えるために、アイオレシートを上手に活用して頂きたいと思っています。

## ● 野口 和行 (のぐち かずゆき)

慶應義塾大学体育研究所准教授

日本教育科学研究所自然体験活動推進委員

1967年生まれ。東京学芸大学教育学研究科修了。1994年からアイオレシートの制作と普及に携わる。現在は発達障がいのある子どもたちを対象とした自然体験活動の実践にも取り組む。



# 分身のような 「ちょっとだけよ」

廣見 美佐

「野外教育情報」が届くたび、今回はどうかかと、わくわくどきどきの気持ちで表紙を開けます。

というのも、16年前に参加し、その中で作った創作ゲーム「ちょっとだけよ」が、アウトドアゲーム指導法講習の中で使われていることがあるからです。講師の先生方の姿や参加者の感想を見るたびに、可愛がってもらっているなあ、とほっとした、まるで我が分身を思うかのような気持ちになります。

私はもとは小学校教員です。学校現場にいた時、自然に囲まれているにも関わらず、その中で遊ぶ子どもの少ないこと、興味を持たない子どもの多いことに驚きと危惧を覚えました。

自然には不思議や美しさがいっぱい、学ぶべき知恵がつまっているのに、それらを知らないなんてもったいない。自然に興味・関心をもってもらえるよい方法はないかと考えていたときに、講習会でIOREシートと出会い、どんどん惹かれていきました。

したのはネーミング。講師の先生に「名前がすべてを決めます」とアドバイスされ、ちょっと古いけど一番ぴったりくる呼び方にしました。個々の面白さに気づいてほしいとの思いも込めて。

初めて出会った仲間にもかかわらず、短い時間内に意見を出し合い、笑いがたえない中から出てきた“名作”と自負しています



「ちょっとだけよ」を使った活動

講習会で作った自分たちのシートが活躍している、大げさにいえば自然体験活動のお手伝いをしている…ちょっと誇らしい気持ちです。これからもたくさんの人と「ちょっとだけよ」が会ってくれるとうれしいです。



「ちょっとだけよ」は現場ですぐに使えること、自然に親しむきっかけづくりになることを考えました。植物の名前…初めは知らなくていい。でも「雑草」とひとくくりにするのではなく、まずは「一つひとつ」に関心を持つようにする。良さ

に気づけばもっと知りたいと思うようになる…そんな思いがあります。

興味を引かせるために小出しにしたらいいかも、小窓をつくろう、となったのはみんなで話し合っているときに出てきたアイデアです。一番苦労

● 廣見 美佐 [ひろみ みさ]  
高知県キャンプ協会事務局

高知県生まれ。高知大学卒業後、公立小学校教師として約20間勤務した後、2012年より県立青少年施設で社会教育主事として体験活動を指導する。

# 私の好きな場所



## 池畑 亜由美

10年ほど前、オープンウォータースイミングの大会のサポートとして、オーストラリアのパースに行ったことがあります。ある朝、現地の子供たちが、スクールバスに乗ってビーチまでやってきました。彼らはすでにラッシュガードにサーフパンツの装い。すぐにグループに分かれ、海で待っていた水泳指導員の指示のもと、ライフセービングスキルを中心としたプログラムを始めました。

その姿が、なんともイキイキとしていて楽しそう！思わず私も一緒にやりたくなるような雰囲気でした。「こんなプログラムを日本でもやりたい！」そう思ったのが、私が子供たちの海キャンプを始めたくっかけでした。

さっそく日本でも同じようなプログラムを主催しようと計画を練り始めました。課題は場所選びですが、日本は島国なので海には恵まれ、いろんなビーチが候補にあがりました。しかし、交通手段や漁業区域や遊泳区域の規制、ライフセーバーの有無等の条件があり、ワンディプログラムをやってみても、足場が岩であったり、海水浴場で人が多かったりと、なかなかイメージしているオーストラリアのビーチに近い海が見当たりませんでした。そんな中、ライフセービングをやっている友人から紹介してもらった海が波崎でした。

それから10年、波崎で海キャンプを続けています。キャンプの初日、ビーチに足を踏み入れた瞬間、「ただいま～！さあ夏が始まるぞ！」といった気持ちになります。そこで子供たちは、ビーチフ



ラッグスやビーチサッカー、ニッパーボードでの波乗り等、日が暮れるまで海でのプログラムを楽しみます。楽しんだ後は、お礼の気持ちを込めてビーチクリーンもみんなで行います。そんな子供たちの姿がオーストラリアで見た光景と重なったとき、私はこの海を大切に、子供たちに海遊びの楽しさを伝えていこうと心に誓います。

野外教育にかかわる人々には、誰にも大切にしているお気に入りの場所があるのではないのでしょうか。「ここに来ると初心に戻れる」、「ここで私は育ててもらったと思える」、「大切な人たちと大切な時間を共有したい」等々・・・場所には、いろいろな『思い』が存在していると思います。そんな思いを共有できたら素敵だなと思い、今回のテーマを「私の好きな場所」にしました。みなさんの好きなお気に入りの場所はどこですか？

### ● 池畑 亜由美 [いけはた あゆみ]

海人(うみんちゅ)きっず主宰

東京家政大学専任講師。幼少期から水泳を始め、大学卒業まで競泳に携わる。大学院の時に野外教育と出会い、「泳ぎが得意！」という強みを生かして海のパログラムに興味をもつ。その後、オーストラリアのライフセービング教育を取り入れた子供たちの海遊びキャンプ「海人(うみんちゅ)きっず」を主宰。毎年、茨城県波崎をフィールドに子供たちに海遊びの楽しさを伝えている。